

立命館大学 人間科学研究所報

第 3 号

目 次

2003年度人間科学研究所運営委員会と プロジェクト・課題別研究会の紹介	1
人間科学研究所研究会開催報告	
2002年度 学術フロンティア推進事業 プロジェクト研究報告	2
2002年度 プロジェクト研究会報告	15
2001年度 課題別共同研究会報告	18
2002年度研究所日誌	23

2002年3月 立命館大学 人間科学研究所

2002年度 人間科学研究所 運営委員会

所 長		佐藤 嘉一	産業社会学部教授
専任研究員	紀要編集委員	佐藤 達哉	文学部助教授
運営委員会	紀要編集委員	望月 昭	文学部教授
	紀要編集委員	中村 正	産業社会学部教授
		野田 正人	産業社会学部教授
		中川 勝雄（前期）	産業社会学部教授
	紀要編集委員	八木 保樹（後期）	文学部教授

2002年度 人間科学研究所
プロジェクト・課題別共同研究会

プロジェクト

	プロジェクト	代表者
A 1	対人援助学（コアプロジェクト）	望月 昭（文学部教授）
B 1	個人史の事例	池田 善昭（文学部教授）
B 2	ヒューマンファラシー	八木 保樹（文学部教授）

課題別共同研究会

研究会名	代表者
人格発達と教育研究会	高垣 忠一郎（産業社会学部教授）
発達相談・発達援助研究会	荒木 穂積（産業社会学部教授）

2001年度 プロジェクト研究報告

学術フロンティア・コアプロジェクト
「自己決定 QOL 部会」
代表者 望月 昭 (文)

第1回～第5回 (中間報告)

(2001.10.28～6.15)

本研究会では、主に知的障害を持つ個人についての自己決定というテーマで、関連する論文をHSP(Human Service Platform)上に公開し、具体的実践的研究を紹介するとともに、内容に関しての公開討論にまで範囲を広げることを目的としている。

これまでの作業の具体的内容としては、

HSP にアップする論文の選定
HSP にアップする際のフォーマットの作成
論文の読み合わせ

という3つの作業を行ってきた。

については、研究会に参加している教員及び院生で、各自が講読する論文をリストアップし、調整して割り当ての論文を決定した。

については、院生が論文を1本講読し、HSPにアップするための書式を考案し、それをもとに研究会のメンバーすべてで検討してフォーマットを決定した。

については、で決定されたフォーマットをもとに、研究会のメンバーが各自で論文を講

読している段階である。現在までに1本の論文のHSP用まとめが完成した。

これからの研究会では、

- ・各自が割り当てられた論文のまとめを研究会で発表して、それについてメンバー全員で討論し、最終的なHSPへのアップの形を決定していく。
- ・論文のまとめを、ネット上で公開していくための具体的作業(ホームページの作成、論文のまとめのスキャナでの取り込み等)をしていく。

という2つの作業を行なっていく予定である。

【濃添 晋矢 (応用人間科学研究科)】

学術フロンティア・コアプロジェクト
「臨床社会学部会」
代表者 中村 正 (産)

第1回研究会(2001.6.12)

テーマ：子どもの監護と自己決定

報告者：森本 琢巳 (社会学研究科)

第2回研究会 (2001.7.3)

テーマ：障害学と臨床社会学との接点

報告者：中根 成寿（社会学研究科）

本研究会では、「障害とは何か」という問いを整理するために、日本やアメリカ、イギリスで急速に発展しつつある「障害学 disability studies」についての整理を行なった。またこうしたマクロな視点を臨床の現場でいかに応用するか、という観点から発表者の実践する「障害をもつ子の親」へのナラティブ・アプローチの報告がなされた。

障害学とは、以下のような特徴を持つことが整理できる。1. 社会福祉学とは明確に異なった視点を持っているということ、2. 「障害=文化」であると捉えること、3. 当事者の経験を重視しているということ、4. 「医学モデル」に対するアンチテーゼとして「社会モデル」の確立を大きな目的としているということ、以上である。

本研究会では、障害学が当事者の主張のみを重視しすぎると「障害がある人」「障害のない人」のカテゴリ化だけが進んでしまうのではないか、という批判がなされた。

かつて女性学が当事者の学問として興隆したときもこのような批判がなされた。その結果、カテゴリ化、またはカテゴリ間の断絶を乗り越えるものとして生み出されたのが gender という概念である。問題は属性の間にあることを表現した概念である。

障害学もこれと同じような概念を生み出す必要があるのではないか。それはすなわち「障害=barrier」は「障害がある人」と「今のところ障害のない人」の間にあることを表現する必要がある。

「障害」とは、個人における生物学的な impairment（欠損）ではなく、個人と個人の関係の間に横たわる barrier である。今後も継続

したい問いを続けていく必要性が確認された。

以上のようなマクロレベルでの問いは臨床での取り組みを個別の現場で断断させないために必要である。コアプロジェクトの中で、「障害とは何か」の問いを続けていく意味は非常に大きいと言える。

【中根 成寿（社会学研究科）】

第3回研究会（2001.7.17）

テーマ：親密性・ケア・自己決定

報告者：松島 京（社会学研究科）

『親密性・ケア・自己決定』というテーマにそい、親密性とケアと自己決定とのそれぞれの関係性について報告をした。親密性（親密圏や親密な関係性）はひとが生きていく上で必要とされるものであり、それは具体的な他者との身体的な接触のある場でもある。そしてその場はこれまで家族であるとされてきた。ケアはそのような場で行なわれる行為であり、ケアに含まれるジェンダーに関する問題や権力関係に関する問題が存在することは、親密圏としての家族にも含まれる問題でもある。また、ケアをする人/される人の自己決定については、ジェンダーに関する問題や権力関係に関する問題という視点を持つと、ケアをする人/される人のどちらの立場においても自己決定をすることの困難さが見えてくる。

こうした報告をふまえた上で、家族というものの非対称性についても議論をした。男女についての非対称性は理解しやすいが、親子についての非対称性とはどういうことであろうか。こうした議論は子どもの自己決定という問題への視点をあきらかにするものであり、臨床社会的な視点で家族（親密圏）をみるということへもつながるものであるといえる。

【松島 京（社会学研究科）】

テーマ：教室の中の自閉症児

報告者：市川 富美子（小学校教諭）

第4回研究会（2001.7.30）

テーマ：エコマネーとコミュニティの形成

自己決定のためのお金

報告者：中村 正（応用人間科学研究科助教授）

今回の研究会は、報告の中村先生が体調不良で欠席のため、ビデオ『エンデの遺言』の観賞を行なった。

グローバリゼーション、その原動力となっている「貨幣」という非人格的システムは、私たちの生活のあり方そのものを規定している。どのようにして断絶された人間相互の関係性を再構築するのか、どこに新たな連帯や共生の方向性を見いだすのか。この問いの一つの答えが、エコマネーである。

ビデオ観賞後は、エコマネーがもっている今日的な可能性を中心に、意見交換を行った。人々のつながりを基盤としながら、ギブアンドテイクを基本として相互に労働を交換しようという人間関係のあり方は、示唆に富むと思われる。また、エコマネーがもっている「反グローバリズム」というメッセージ性も指摘された。さらに、滋賀や釜ヶ崎などの実例も出され、日本での実現可能性についても意見が交わされた。

また、社会学研究科M1の森本さんが、家庭養育促進協会の広報紙の記事をまとめた『信じあって親子、語りあって家族』（2001年）を報告した。ここでは、里親を希望するのはどのような場合か（不妊治療とのかかわり）、里親として認められる基準はどのようなものか、なぜ里親制度が日本で普及しないのかなどが論点として挙げられた。

【斎藤 真緒（社会学研究科）】

第5回研究会（2001.8.30）

今回は自閉症児への援助として、とりわけ小学校での教育的援助の取り組みについて報告が行なわれた。自閉症は、その特徴として、まわりの世界の意味がわかりにくいということがある一方で、目で見て理解する力（視覚認知）や一度学習したことはきちんとこなすなどの強みがある。したがって、自閉症の子どもに対する教育援助としても、こうした視覚認知の強みを生かした環境の整備や指導が必要と考えられる。こうした指導法の一例として、アメリカのノースカロライナ大学を中心に行なわれているTEACCH(Treatment and Education of Autistic and related Communication handicapped Children)というプログラムが紹介された。このプログラムは、大学と州政府および地域社会との協力関係・連携、親と専門職とのパートナーシップ、構造化された指導法といった特徴がある。実際に、報告者である市川さんがかかわっている自閉症のB君の学校での様子が非常に克明に報告された。

議論では、TEACCHのような強さを生かした援助（Strength-based practice）のあり方や、学校という現場での対人援助のあり方が論点となった。また、B君の事例にかかわって、B君にかかわっているまわりの人間の変化、親の関わり方、教師同士の協力体制や中学校との連携の問題について、質問が出された。また、京都を含む日本での行政レベルでの取り組みの遅れが指摘された。

【斎藤 真緒（社会学研究科）】

第6回研究会（2001.9.18）

テーマ：親になることへの援助：

助産婦の実践から

報告者：小嶋 理恵子（社会学研究科）

第7回研究会（2001.10.2）

テーマ：寄せ場の臨床社会学へ向けて

- 釜ヶ崎とはいかなる

コミュニティーか

報告者：西田 心平（産業社会学部助手）

本報告では、大阪市西成区にある通称「釜ヶ崎」での報告者によるフィールド調査を踏まえ、問題関心である「コミュニティ・アプローチ」の研究視座に関する中間報告を行った。第1に、寄せ場の臨床社会学という枠組みを設定するとき、日雇労働者や野宿者の高齢化を背景に、寄せ場が一層臨床現場へと変容しつつあるという現実が視野に置かれなければならない。すなわち、市民運動やNPOの介入による支援者と被支援者との関係性の問題化という視点である。第2に、こうしたフィールドの変容にともなって、報告者が調査対象としている野宿者も援助を受けながら寄せ場コミュニティの一員として組み込まれつつある。具体的には野宿生活からの脱却をはかり、2001年7月より生活保護による居宅での定住生活を始めている。第3に、フィールドと調査対象者の以上のような変容ぶりを考えるとき、そこへ関与していく社会学の役割もそれに応じて変化していく必要がある。すなわち野宿者にとっての数々の課題は、生活保護を受給することで全て解決されるわけではない。そこで問題は、いかにしてコミュニティを形成していけるかということに関わってくる。こうした観点から「福祉国家とホームレス」という課題設定に留まらず、NPOによる具体的なコミュニティづくりの実践を射程に置いた上で、野宿者を含めたそこでの相互作用を記述し

ていく研究が必要であると考え。

【西田 心平（産業社会学部助手）】

第8回研究会（2001.10.16）

1. テーマ：里親制度のもう1つの可能性

報告者：森本 琢巳（社会学研究科）

2. テーマ：感情を育てる教育は可能か

～アメリカ・カナダの教育

プログラムの事例から～

報告者：野池 雅人（応用人間科学研究科）

第9回研究会（2001.10.23）

テーマ：里親制度のもう一つの可能性

報告者：森本 琢巳（社会学研究科）

離婚に際して両当事者間だけの協議では紛争が終結せず長期化している傾向がみられることから、これに第三者をかかわらせることでより効果的な清算を目指す目的で、離婚に里親制度がリンクする可能性について報告した。まず簡単に離婚事件の事態と里親制度について説明した後、実際の養育里親のケースを概観して上に示した可能性を考察し、クリアすべき課題を列挙した。

今後まず重要となるのは自分のスタンスの明確化と理論モデルの構築であると考えている。

【森本 琢巳（社会学研究科）】

第10回研究会（2001.10.30）

テーマ：セルフヘルプグループへの

臨床社会学的接近

問題を抱えたまま生きること

報告者：中根 成寿（社会学研究科）

10月30日の臨床社会学部会は、コアプロジェクト室にてプロジェクトをセッティングし、

「セルフ・ヘルプ・グループ」という集団を社会的に分析することはどういう意味を持つのか、について報告がなされた。

セルフ・ヘルプ・グループとは、問題を抱えた当事者やその家族（当事者性を持つ者）が自発的に形成する、小集団のことである。

報告者により、セルフ・ヘルプ・グループの特徴が報告され、社会学（だけに限らず学問一般）が指向する「普遍性」とセルフ・ヘルプ・グループがもつ「個別性」と非常に微妙なバランスにあることが確認された。しかし、それでもなお、社会学には、セルフ・ヘルプ・グループの分析にむかう必要があることがいわれた。それは、「コミュニティからアソシエーションへ」、「共同体から市民社会へ」、「属性主義から業績主義へ」という社会学が長らく持ち続けてきたテーゼが、ポストモダン終焉後、修正を迫られているのではないかという疑問がその必要性を後押ししている。

さらに、現場から生まれた実践集団故に、メタレベルの議論がセルフ・ヘルプ・グループに対してなされていないという問いも提出された。すなわち、セルフ・ヘルプ・グループというときの「自己（self）」とはどんな自己か、「援助（help）」とはどのような援助なのか、そして「集団（group）」という時に、どんな集団を想定しており、それぞれがどのような特徴を持っているのかというセルフ・ヘルプ・グループに対するメタ理論の不在が課題として浮き彫りになった。

セルフ・ヘルプ・グループは、臨床社会学が目指す現場での介入方法として有益なものであると認識されている。今後もこうした地道な取り組みを続けていくことが確認された。

【中根 成寿（社会学研究科）】

第 11 回研究会（2001.11.6）

テーマ：ケアの臨床社会学の可能性

報告者：松島 京（社会学研究科）

ケアをする／されるという相互行為がもつ特徴として、関係の非対称性ということがあげられる。非対称な関係であるからこそ、依存をする／されるという関係や支配する／されるという関係になりやすいともいえる。この非対称性が、ケアが暴力に転化をしてしまうひとつの要因である。ケアは、養育や介護や家事や気遣いというように、人が生活をしていく上で必要な行為であるが、ケアの持つ両義性を欠いたまま、ケアの必要性やケアする人の成長についてのみ語るということは、ケアが暴力をはらみうるということを覆い隠してしまうことになりかねない。

ケアの臨床社会学とは、ケアという相互行為のなかに発生する関係性を詳細に捉え、ケアの両義性に着目するところからスタートする。そのうえでケアのもつ相互作用の重要性についての考察をしていくことが必要となる。これらをふまえた上で、ケアの現場を調査することにより、ケアの臨床社会学はより深まるだろう。

【松島 京（社会学研究科）】

第 12 回研究会（2001.11.13）

テーマ：イギリスにおける Parenting

Education の動向

報告者：小嶋 理恵子（社会学研究科）

齋藤 真緒（社会学研究科）

学術フロンティア・家族プロジェクト

代表者 中村 正(産)

第1回研究会(2001.5.30)

テーマ：感情管理社会と臨床社会学

報告者：斎藤 真緒(社会学研究科)

石川准は、「感情」を、「生身の身体と歴史と社会と文化との結節点の様態」として位置づけた。そして石川が依拠している「感情社会学」の主要な論客であるA・ホックシールドは、資本主義社会の発展とともに、「心」の酷使という形で、看護、治療、介護、教育といった現場で、感情が「商品化」(A・ホックシールド)されていることを指摘した。

今回取り上げたのは、「感情管理社会の感情言説 作為的でも自然でもないもの」(『思想』No. 907, 2000年)だが、この論文は、感情管理を通じた社会統制が行なわれている今日の社会において、感情とどうつきあうのかを問うている。研究会では、感情を、主体を生成する社会的機能としてとらえることが重要であるという石川の主張をめぐって、議論が交わされた(よだれに対する「生理的嫌悪感」をどうとらえるのか、など)。「自らの感情を手っ取り早く正当化したり抑圧したり消去するより、そうした感情が提供するシグナル機能を積極的に活用して、感情から逃げずにそれに切り込み、学び、不安、当惑、無力感の『正体』を掴むことが必要である。こうした取り組みのひとつの事例として、論文ではピア・カウンセリングが取り上げられていたが、議論では、裁判といったマクロなレベルでの記憶・トラウマの「書き換え」という視点も重要である」という意見が出さ

れた。

【斎藤 真緒(社会学研究科)】

第2回研究会(2001.6.11)

テーマ：Prosocial behavior, Proactive justice/policy に関するリサーチ及びビデオ鑑賞

Conflict Resolution にかかわる取り組みの状況把握の一環として、Prosocial behavior, Proactive justice/policy をキーワードとするインターネットでのリサーチ結果を各自がもちよった。ひとつは、野池と斎藤から、「Ripple Effects」についての報告があった。ここでは、学校および職場における Emotional Intelligence(Daniel Goleman)・スキルを高めるためのソフトウェアが開発されている。基礎となる social-emotional Learning(SEL)においては、empathy, assertiveness, impulse control, management of feelings, decision-making skills, self-understanding, connection to community という7つのKeysが提起されている。また、松島からは、攻撃的な青年や子どもへの介入プログラム「Aggression Replacement Training(ART)」に関する報告があった。ここでは、Prosocial なスキルを獲得するための Skillstreaming、怒りの感情をコントロールするトレーニング、モラルに関するトレーニングが取り組まれており、ワークショップ後のフォローアップ体制やトレーナー育成なども組み込まれている。もう一つ松島から紹介があったのは、親に対して問題行動を起こす子どもの管理をさせるプログラム「Parent Management Training for Oppositional and Conduct Problem Children(PMT)」であった。このプログラムは親業の発達という観点から、親自身の

行動を修正し、親子の相互作用のなかで、子ども
の anti-social な行動を Pro-social な行動へと
変化させることを目的としているものであった。

【齋藤 真緒（社会学研究科）】

第3回研究会（2001.6.25）

テーマ：今後の取り組みに関する打ち合わせ

2001年1月以降、臨床社会学をキーワードと
して文献講読を中心とする研究会を重ねてきた
が、今回は学園祭企画を含む今後の活動の方向
性とテンポの確認を行った。学園祭の企画につ
いては、いくつかの私案をもちよることとした。
また参加者からは、学園祭企画と同時に、文献
講読を継続したいという意見があり、学園祭企
画と並行して文献講読を行うことを確認し、文
献の選定を行った。また今回は、文学を題材と
した社会学的思考のひとつの題材として、新美
南吉の「屁」を読み、ラベリングの立ち上がり
方や主人公によるラベリングの相対化などに
ついて議論を行った。

【齋藤 真緒（社会学研究科）】

学術フロンティア
家族・臨床臨床教育プロジェクト
（合同部会）

第1回研究会（2001.6.25）

テーマ：いじめ克服プログラム”Second Step”
のとりくみについて

報告者：野池 雅人（応用人間科学研究科）

今回の報告は、2001年6月16日に東京都神
田にて開催されました日本子どものための委員
会主催の「セカンドステップ（子供の健全育成
ならびに暴力防止プログラム）」についての日本

版設立記念式典・特別講演の内容をまとめたも
のです。この「セカンドステップ」はアメリカ
において開発されたものであり、アメリカの
小・中学校中心に1万校以上で実施されている
教育プログラムです。アメリカの教育省におい
てその効果が認められ、現在非常に注目されて
います。私たちのプロジェクトの課題である「学
校や家族の問題に対してより効果的な実践方法
はないか」という問いの一つのモデルとなると
考え、今回の報告が行われました。

今後も、「セカンドステップ」の調査を進めて
いきますのでまた報告していきたいと思います。

【野池 雅人（応用人間科学研究科）】

第2回研究会（2001.7.9）

テーマ：「協調的交渉術」から学ぶ Conflict
Resolution

報告者：齋藤 真緒（社会学研究科）

今回は、コロンビア大学 Teachers Collage 大
学院における社会組織心理学プログラムである
「協調的交渉術（Conflict Negotiation Skill
Training）」について検討した。コンフリクトが
生起する要因、あるいはコンフリクトへの対処
パターン（回避、交渉、調整、仲裁、訴訟、戦
争）など、コンフリクトをめぐる基本的な理解
を踏まえた上で、「協調的交渉術」は、どちらか
が負ける（Lose/Win）という競合的な
（competitive）解決ではなく、両者が自分のニー
ズを満たすことができる Win/Win 型の問題解
決手法であるという位置づけが成されている。

「協調的交渉術」では、お互いの立場の背景に
ある「潜在的欲求」に焦点を当て、どうしたら
お互いの潜在的欲求を満たすことができるのか
を模索し、問題を再構築する。

このプログラムについての理解を深めるため

に、報告の間に、2つのアクティビティを参加者全員で行った。また議論では、交渉の際に注目する「潜在的欲求」をめぐって、その両立可能性について、疑問の意見が集中した。

また、カナダで実際に取り組まれている子ども同士の紛争解決プログラムについてのビデオを鑑賞した。カナダでの取り組みは、とりわけ地域や市の教育委員会の協力のもとで行われており、日本との違いが非常に際だった。

【齋藤 真緒（社会学研究科）】

第3回研究会（2001.7.23）

テーマ：Social and Emotional Learning (SEL)
の研究動向について

報告者：松田 祥（応用人間科学研究科）

本プロジェクトは、日常起こる様々な葛藤を解決してゆくためのプログラムを研究している。本日の報告会は、アメリカで広く普及している社会性と感情の教育（SEL）を紹介した著書「社会性と感情の教育」（M.J.イライアス他著、小泉令三編訳、北大路書房）他二冊の文献研究を行った。

話し合いの内容としては、文献自体が理論的な根拠の薄いものだった、ということもあり、SELとは一体どういうものなのかイメージが湧き辛い、という意見が多かった。しかし、実践的なスキルをまず見学した上でその理論を考えてゆく、ということもあり得るのではないかと、という意見も出された。これからのプロジェクトの動向としては、日本で行われるプログラムに参加して行き、まずはモデルを作ることが優先されることとなった。

【松田 祥（応用人間科学研究科）】

第4回研究会（2001.9.10）

テーマ：アメリカにおける Social Skills Program (Tribes) の取り組み

報告者：森本 琢巳（社会学研究科）

前半は日本こどものための委員会によって紹介されたセカンドステップについて。これは本人の内部に生じた怒りをどのように克服するかについて組まれたプログラムであり、今回はそのレッスン内容の一部が報告される。

後半はトライブスという教育カリキュラムについて紹介。それは子供の自尊心、アイデンティティ、社会的責任を学習させる内容であり、社会変化に伴い外部化された家族機能を担う教育プログラムとして活用されていることが報告される。ポイントは子供を取巻く周縁を拡大して参加させていくことと子供自身もつ resiliency に着目して活用していく点にある。

【森本 琢巳（社会学研究科）】

第6回研究会（2001.10.15）

テーマ：Peace Games Toronto における Social Skills Training:

報告者：松田 祥（応用人間科学研究科）

長岡 大澄（応用人間科学研究科）

野池 雅人（応用人間科学研究科）

これまでにやってきたことの確認と、今後の進め方について話し合う。アクティビティの取り扱いは、今後検討する。今日は、その中からピースゲーム・トロントのユニット1～3まで実際に自分達でやってみる。それぞれを実際にやってみて、全体でシェアして、トロント版の細かな改正や、意見のいいあいをして、今後のプログラムとしての適応をはかる。ピースゲームの理念と目的の紹介、怒りの段階的拡大・縮小、コミュニケーションプログラムについて今

回おこなってみて、ある程度スムーズにできた。
あと、来週、再来週と、残りのユニットのアク
ティビティをしてみて、最後に一つのプログラ
ムとして改訂できればいいと思われる。

【長岡大澄（応用人間科学研究科）

第7回研究会（2001.10.22）

テーマ：Peace Games Toronto における Social
Skills Training

報告者：西田 心平（社会学研究科）

松島 京（社会学研究科）

斎藤 真緒（社会学研究科）

本研究会では、前回に引き続き Peace Games Toronto における Social Skill Training の各種実践を参加者全員によりワークショップ形式で行った。今回のファシリテーターは、西田、松島、斎藤（森本の代理により）が務め、テキストの4章から6章までの課題をこなし、それをビデオで撮影しながら資料として記録した。実践内容としては、「相手の考え方や文化的な違いを尊重する」、「自らの内なる力を理解する」、「協力・協調により相互の目標に到達する」がコンセプトとして提起されていた。それに応じて主にロールプレイを多く含んだアクティビティが、それぞれのファシリテーターから紹介され、参加者全員で実践するという形式をとった。その後、内容をめぐってディスカッションを行い、体験した率直な感想、アクティビティが意図する内容や反省点などについて意見を出し合った。さらに今後の課題として、日本の学校教育の現場に適應する際の留意点や可能性、そしてどの内容がどのようにアレンジできるかなどを話し合い、本研究会独自のプログラム構築をめぐって議論を行った。

【西田心平（社会学研究科）】

第8回研究会（2001.10.23）

テーマ：Peace Games Toronto における Social
skills Training -

報告者：斎藤 真緒（社会学研究科）

第9回研究会（2001.11.12）

テーマ：いじめ防止プログラム「セカンド・ス
テップ」のグループワーク

報告者：野池 雅人（応用人間科学研究科）

松田 祥（応用人間科学研究科）

第10回研究会（2001.11.19）

テーマ：Social Skills Training (Tribes)

報告者：五味 幸子（応用人間科学研究科）

本日の研究会では、「TRIBES」というソーシャルスキルトレーニングの中から3つのアクティビティを取り出して、実際に参加者のあいだで試行した。

このアクティビティを通じて、まず過去・現在・未来の自分をイメージで表現すること、感情を身体動作で表現することを試し、さらに、2人のメンバーがいかに協力して1つの作業に取りかかるのかが明らかになった。

アクティビティを体験することで、「TRIBES」がソーシャルスキルトレーニングという観点から有効な方法であることが確認された。

【五味幸子（応用人間科学研究科）】

第11回研究会（2001.11.26）

テーマ：『自律訓練法』

報告者：中村 正（応用人間科学研究科助教授）

テーマ：臨床動作法

報告者：村本 邦子

臨床動作法は、動作を主たる道具とする心理臨床活動のことを指すが、この動作法の歴史、意味を概観した上で、動作法の演習を行った。参加者でペアをつくり、坐位（あぐら）での肩上げ、肩開きを行った。援助者は、被援助者の「体の感じ」を聞き、肩への触れ方を工夫し、相手の動きを感じ取るよう工夫した。その後、役割交替した。最後に、立位で踏みしめ課題を行った。体験を分かち合った後、非言語的な援助法について話し合った。

最後に、自律訓練法のビデオをみながら、各々実習した。

【村本 邦子】

第12回研究会（2001.12.10）

テーマ：これまでの取り組みのまとめ

今日は、この間研究会で取り上げてきたセカンドステップについて、愛知での取り組みの紹介を野池君に行ってもらおうと同時に、5月以降の取り組みの中間総括を全員で行った。

セカンド・ステップ愛知は、中学生向けビデオ(『CHECK IT OUT』)を独自につくっており、それを鑑賞した。5つのスキットから構成されており、それぞれのテーマの活用法の翻訳も行われていた。

中間総括では、セカンド・ステップ以外に、これまでみてきたプログラム（Peace Games Toronto, Tribes, 自律訓練法）に関する全体的な見取り図をつくるのが今後の課題として提起された。またその際、問題行動へのコントロールだけではなく、環境教育で行われているような、よりポジティブな取り組みとしての協調的行動（pro-social behavior promotion）も重要であるという意見もだされた。また、全体的な着地点を意識しながら具体化する必要がある

という指摘もあった。

1月以降の取り組みとしては、京都という地域的特性（寺との交流）を生かした独自のプログラムの開発、他の研究プロジェクト（具体的には兵庫教育大学の心の教育総合センター）との交流などが挙げられた。

【斎藤 真緒（社会学研究科）】

第13回研究会（2002.1.21）

テーマ：Conflict Resolution Program の射程とその理論的系譜

報告者：野池 雅人（応用人間科学研究科）
松田 祥（応用人間科学研究科）

第14回研究会（2002.2.18）

テーマ：「心の教育実践」

- 兵庫県心の教育総合センターの
取り組みから -

報告者：富永 良喜
（心の教育総合センター主任研究員/
兵庫教育大学教授）

学術フロンティア
臨床教育プロジェクト
代表者 中川吉晴（文）

第1回研究会（2001.11.16）

テーマ：自己変容 - 「超える」と「もどる」

報告者：西平 直

（東京大学大学院教育学研究科助教授）

今回は、西平直氏の講演をもとに参加者のあいだで活発な討論をおこなった。話のテーマは、

東洋哲学の立場から人間の発達、子どもの教育、自己変容がいかに捉えられるかを問うたもので、西平氏の最新の考えが開陳された。おそらくこの分野では、日本において並ぶ者なき研究者である西平氏の考えにふれられたことは、参加者一同にとって得がたい経験になったものと思われる。討論では、本学の教員を中心に、核心をついた議論が展開された。きわめて刺激的な会であり、今後も同じメンバーで継続した議論をおこなっていくことを約して、閉会した。

【中川吉晴（応用人間科学研究科）】

第2回研究会（2001.12.21）

テーマ：禅と自己変容

報告者：林 信弘（文学部教授）

本日の研究会では、林先生が自らの禅理解を話された。禅を自己変容パラダイムとの関連で論ずることは、今後も研究会で予定されている一連の発表、すなわち多様な伝統の中で捉えられる自己変容を明らかにする作業の第一段として重要なものであった。禅への研究会での取りくみは今後も継続されるが、とくに今回は、その導的な内容として意味のあるものだった。

参加者からの質問も、自己変容にかかわるものが中心で、活発に行われた。

【中川吉晴（応用人間科学研究科）】

第3回研究会（2002.2.1）

テーマ：気功と自己変容

報告者：岩崎 正春

（京都造形芸術大学非常勤講師）

今回の研究会では、トレーニングルームを用い、実習も含めた形でレクチャーをしていただいた。参加者は、この形式に大いに満足していたようである。気功というあまり知られていない領域

を、岩崎先生は、とても分かりやすく説明してくださった。気という中国的概念の意味内容を現代科学及び心理学の用語を用いながら解説し、参加者の理解を大いに深めてくれた。実習も含めて（次回も）継続的な研究を行いたい分野である。

【中川吉晴（応用人間科学研究科）】

第4回研究会（2002.2.19）

テーマ：ホリスティック臨床教育学と自己変容

報告者：中川吉晴（応用人間科学研究科）

今回は、ホリスティック臨床教育学の観点から、自己変容を、人間形成、自己治癒、自己超越という三重の重層的ダイナミズムのもとで捉える枠組が示され、討議された。本年度の研究会のしめくくりとして、今後の方針の確認も行われた。

【中川吉晴（応用人間科学研究科）】

<p style="text-align: center;">学術フロンティア ライフデザインプロジェクト 代表者 津止 正敏（産社）</p>

第1回研究会（2001.10.13）

テーマ：・研究会の運営について

・報告1 城陽市深谷校区での
「生活応援隊」の取り組み

・報告2 シオノギの
エンプロイサービス

報告者：報告1 高畠 ハルミ（深谷社協）

報告2 文字 英夫（RITsVC）

第1回例会を次のとおり開催した（参加者2

2名)

内容は以下の通り。

1. プロジェクト例会の運営と研究内容についての報告を津止から以下の通り行った。例会では、生活の規定力と社会関係・社会制度・社会意識との相互規定によって形成される現実の生活場面において発生する様々な生活・福祉問題を焦点化する。社会変化の先端部門で取り組まれている、あるいは取り組まれてきた各地に実践の報告と討議を中心に進める。
2. 報告1. 城陽市深谷校区での「生活応援隊」の取り組み。開発30年超の住宅地における、男性定年退職者を中心とした、家具の移動、修理、取り付け、電気製品の簡単な修理などの生活支援の活動。「これまではなんでもない些細なことが問題になる時代」である。住民活動を進める組織のあり方、プログラムのあり方、に関心が集まった。
3. 報告2. シオノギ製薬のエンプロイサービス。昭和40年代の大企業における社員福利厚生事業の成立背景、狙いについての報告。社員福利厚生は「生産性向上に結びついた従業員(エンプロイ)サービス」である。時代の進歩に遅れないように、必要なときに必要なサービスをする体制がなければならない。その一つに「ホームヘルパー」の派遣制度があった。遅れた福祉施策の裏側での一般住民と大企業従業員との「2重構造」の一例。

【津止 正敏(産業社会学部助教授)】

第2回研究会(2001.11.10)

テーマ:『困難ケースへの関わりから見た地域社会の福祉力』

報告1. 痴呆性独居老人が地域社会で生活する

ために:

報告2. Aちゃんとその家族への支援について:

報告者: 報告1. 井上 公子

(産業社会学部実習指導室)

報告2. 津村 恵子

(京都障害児に学童保育所を保障する連絡会)

報告1: 「痴呆性独居老人が地域社会で生活するために」

次の2つの事例を比較しながら地域社会の問題対応能力について検討した。

京都市A区に居住するBさんは、74歳の一人暮らしの婦人である。Bさんは結婚したときからこの家に住んでいる。Bさんは警察署長をしていた夫が30年前に病死し、それ以来一人暮らしである事例。

京都市C地区に居住するHさん(48歳・男性)は、離婚後子ども3人(高3・女子、中2・男子、小6・男子)を引き取って暮らしている事例。Hさんの家にはHさん自身の母親(75歳)も同居していたが、最近脳溢血の後遺症で半身マヒになり、Hさんの仕事の時間帯だけ、身体介護のホームヘルパーが入っていた。Hさんの仕事は土木業であったが、最近不景気で仕事が少なく、家計は逼迫していた。家事は高3の長女とHさんが交代で行っていた。

報告2. Aちゃんとその家族への支援について
ピエールロバ症候群という極めて症例の少ない障害児(5歳児)を抱えた家族(両親・弟・本児)の支援についての報告。稀少ケースだが具体的に活用できる公的資源が皆無。母の妊娠・祖父病气入院・本児が命にかかわる重篤の障害のためボランティアは困難・稀少障害例のため病院転院困難・有料ヘルパーは経済的に無

理・など。

【津止正敏（産業社会学部助教授）】

第3回研究会（2002.1.19）

テーマ：

報告1.2001 サンタクロースプロジェクト報告

報告2. サポート隊の活動

報告者：報告1. 大場 孝弘

（京都市南青少年活動センター）

報告2. サポート隊（立命館大学生）

報告1.2001 サンタクロースプロジェクト報告

中高生たちがサンタクロースに扮して地域の子どもたちにプレゼントを届けよう、という12月24日のクリスマスイブの取り組み。2001年で3回目を迎えたプロジェクトの展開についての報告。青少年の地域での役割発揮、居場所作り、大人世代との交流、などについて論点が出された。

報告2. サポート隊の活動

佛敎大学通信教育部に通う障害学生のスクーリング中の支援を引き受けた学生たち（多くは立命館大学生）の活動です。ひとりの障害学生の学習支援を通して大学と障害者、障害者とボランティア、学生とボランティア、大学と学び - など、この報告もいろいろ論点が浮かんだ。参加者のIさんからは君たちの活動は日本の希望のような活動だ、と感想を頂いた。

【津止正敏（産業社会学部助教授）】

第4回研究会（2002.3.23）

テーマ：

報告1. 子育て意識調査と子育てサークルについての調査報告

報告2. 障害児の放課後ケアの動向

- 学校週5日制を前に -

報告者：報告1. 盛武 希

（京都市社会福祉協議会）

報告2. 津村 恵子

（京都障害児放課後ネットワーク）

報告1. 子育て意識・子育てサークルについての調査報告

京都市社会福祉協議会が全国社会福祉協議会の委託を受けて実施した京都市内5箇所の子育てサークルの会員並びにリーダー層に対する子育て実態・意識調査結果について中間的な報告を行った。地域における子育て支援活動の方向性について議論した。

報告2. 障害児の放課後ケアの動向

- 学校5日制を前に -

この4月から学校5日制が完全実施される。1992年の月1回第2土曜日の休日化から10年が経過したが、5日制実施にあたって、特に条件整備の必要性が言われて続けてきた障害児の放課後ケアの到達点と課題について、昨年12月の結成されたばかりの京都障害児放課後ネットワークから報告した。

【津止正敏（産業社会学部助教授）】

学術フロンティア
子ども（育ち合い）プロジェクト
代表者 高木 和子（文）

第1回研究会（2001.5.29）

テーマ：“共同参加の視点から見た子どもの育ち研究”プロジェクト発足に向けて（中間報告会）

報告者：小森 伸子氏（文学研究科）

小森よりこれまでの社会的相互作用における学びを中心テーマとした研究業績を紹介しながら、育ち合いプロジェクトに向けての概要の説明。続いて高田が共同参加における保護者の育ちについての視点から行なった保護者アンケートの意義と目的を説明。さらに高木がプロジェクトのテーマについて補足説明をする。共同参加の場の育ちとして子どもが長時間生活する保育園を取り上げ、育児を通じて子どもだけでなく保護者、保育士も育っていくという育ち合いの過程とその意識の持ち方について議論を展開。

プロジェクトのテーマ、今後の方向性が明確化された研究会となった。

【植村 真紀（文学研究科）】

第2回研究会（2001.6.27）

テーマ：保育学生による子どもの観察記録から考える

報告者：柴田 直峰氏（京都保育福祉専門学校）

柴田氏が、保育福祉専門学院の講師としての立場から今保育士を養成するためにどのような事を考えていかなければならないかという事について報告された。

具体的には、子育て支援への対応をどのように学生に教えていくか、また実習を重視することの重要性、さらに家庭の養育機能の低下が叫ばれているがその中身は一体どのようなものが、養育機能とは何のことを指すのか、養育行動の発達とは親としての発達とは異なるため保育士を目指す学生に「親としての発達」を説明しても不十分であるということなど。また情報によって子どもを観察する目が異なってくるので、どのように子どもを捉えるよう指導すれば良いのか。以上の事を問題提起として挙げられ、参加

者によって議論がなされた。

【長谷川 聡（文学研究科）】

第3回研究会（2001.7.26）

テーマ：育ち合い 研究の枠組みと方法

報告者：高木 和子（文学部教授）

子どもプロジェクト出発の経緯についての概要説明から今後進めていく予定の研究の視点についての報告。研究の視点として1)発達心理学における新しい視点としての文脈論について、2)相互作用の場で何が起きているのかについて捉える視点、3)他者との関係のあり方の変容を捉える視点等が挙げられた。また育ち合いの場を考える視点からの研究の進め方や、研究のフィールドや方法論についての報告発表。その後育ち合いの場としての地域と保育園、保護者の関係性について双方の要求とそれへの対応の現状についての議論が行われた。最後に8月末のゆりかご保育園立命館園外保育行事への参加者を募り予定を立てた。

【植村 真紀（文学研究科）】

第4回研究会（2001.9.26）

テーマ：

1. 育ち合う場への共同参加を測定する試み
2. 母親の子どもに対する不快感情について
- 親密な関係性という性質から -

報告者：1. 小森 伸子（文学研究科）

2. 長谷川 聡（文学研究科）

最初に小森氏より「育ちあう場への共同参加を測定する試み」についての発表。育ちあう場への共同参加を、保育園の保護者会や行事に参加することとして捉え、保育園の中で親同士が

どうかかわり合っているか、保育園と親の関係はどうかということを知る必要がある。そこでFIQ(Family Involvement Questionnaire)の作成を試みた論文を紹介し、FIQの日本での実施可能性の検討について討論を行う。

次に長谷川氏が「母親の子どもに対する不快感情」について発表。子どもに対して不快感情を抱く母親を特殊なものとする風潮が強いが、そうではなく誰にでもあるものとし、それをどのように処理して付き合っていけばいいかを検討する必要性について述べた。

【植村 真紀(文学研究科)】

第5回研究会(2001.11.21)

テーマ：1. アメリカに住む日本人幼児・児童の社会文化的概念の発達
2. 子育てに必要な大人の発達
- 育児不安解消のために -
3. 保護者アンケート(生活発表会)の結果と分析

報告者：1.・2. 吉本 朋子
(本学非常勤講師/京都市
スクールカウンセラー)
3. 高田 薫(文学研究科)

アメリカに住む日本人の日本に関する概念とアメリカに関する概念がどのように異なっているのかを調査した結果の報告と、現代社会において育児を行っている母親の育児に対する不安感をどうしたら軽減できるのか、子育て仲間との関わりにおける経験に焦点をあて、どのような働きかけを行えば不安を軽減できるのか吉本氏により提案された。

また蜂ヶ岡保育園の園児の保護者に保護者会活動についてアンケートを行った。その結果に関して高田氏が発表された。具体的には、保護

者は保護者会活動について、仕事との両立が難しく大変であるとの気持ちを持ちながらも、もっと積極的に参加していきたいとの意識を持っていることなどがわかった。

【長谷川 聡(文学研究科)】

第6回研究会(2001.12.19)

テーマ：お母さんの「しんどさ」、その歴史と子育て支援について
- 現在の子育て支援施策をソーシャルワークの視点で考える -

報告者：中島 円実(社会学研究科)

まず、中島氏より、専業主婦成立までの歴史と、主婦の育児不安の内容が紹介された。討論では、そうした専業主婦の育児不安は専業主婦が生まれた時からのものか？現代の主婦でおこっているのなら、その原因はどういったものか？という点を中心に行われた。

次に、今後のプロジェクトの予定について話し合いが持たれ、保護者を対象としたアンケート調査を行うことが決まった。

【小森 伸子(文学研究科)】

第7回研究会(2002.1.17)

テーマ：年度末までの活動計画

子育て支援研究として、どのような視点による研究を行うかについて出席者により議論が行われた。

まず、どういうものを援助するものと見るのか、どういうものをつまずきと見るかということについて話し合いがなされ、集団に関する問題としてはその場が育ち合う場にも学び合う場にもなれていないこと(良い自分を演出する場としてだけ機能している場合等)個人に関する

問題としては、子ども自身に問題があり援助していかなければならない場合と親に問題がある場合（子どもを作品化する親等）が考えられ、我々が研究者としての立場からどのような研究を以上のような問題に対して行うことで援助していけるのかについて議論が行われた。

【長谷川聡（文学部研究科）】

第8回研究会（2002.2.19）

テーマ： アンケートの作成

今後の活動計画

始めに高木氏が今後の活動計画について「共通の問題意識を持って研究を進めていく」グラウンドデザインの立て方について発表。その後、今後の活動の進め方として、現場の知見をどのように心理学の理論としてくみ上げていくかについてフリーディスカッションを行う。また3月15日に予定されている研究交流会の発表内容・方針を取り決める。

最後に以前実施した「ゆりかご保育園子育て支援サークル（サロン）の名簿調査から把握される参加者のサークル活動の実態について小森氏が報告。さらに今後実施を予定している「統一アンケート」の項目について検討を行った。

【植村真紀（文学研究科）】

第9回研究会（2002.3.15）

テーマ： 一時保育に関する調査の経過報告

報告者：松岡 知子（社会学研究科）

助産婦会と保育園での一時保育を利用している母親への調査をもとに、一時保育の現状を見ていき、これからの子育て支援サービスについて考察した。今回の調査における一時保育の利用理由は多様であったが、助産婦会と保育園で

は違いが見られた。また、京都においてもさまざまなサービスが存在していることが話し合われた。今後は、多種多様なニーズを反映するような調査とともに、それに合わせた子育て支援サービスの質と量の充実が必要だと考えられる。また、こういった子育て支援サービスを使いやすくするためにも、情報を広げる、誰でもがこういったサービスにアクセスできるようにすることや、またこういったサービスを利用しない人の調査も必要だと思われた。

【小山清香（文学部）】

プロジェクト B1

個人史の事例

代表者 池田 善昭（文）

第1回研究会（2001.10.25）

テーマ：西田哲学における純粹経験の二面性

報告者：林 信弘（文学部教授）

本研究報告の主旨は西田幾多郎の有名な処女作『善の研究』の読み解きにある。この書において展開された純粹経験論は通常、主客合一論の典型として受けとられてきた。たしかに主調音としては、そう受けとることができる。しかしそうなると、その後の西田哲学はこの純粹経験論の批判的乗りこえにあったと見なざるをえない。しかし他面、この純粹経験論にはすでに、深い人生の悲哀をかみしめながら、無の場所、無の自覚的限定、弁証法的一般者、絶対矛盾的自己同一、行為的直感等々、後にさまざまな用語を用いて苦心惨愴何とか理論化しようと試みた「主客の対立的合一」論としての純粹経験論が通奏低音として流れているのではないかと

しそうだとしたら、『善の研究』は西田哲学のアルファであり、オメガと見ることができるのではないかということ、一つの仮説として問題提起した。報告後、参加者の方から有益な教示をいただき、感謝している。

【林信弘（文学部教授）】

第2回研究会（2001.11.29）

テーマ：西田幾多郎思想形成の背景

- ある家庭事情の深淵 -

報告者：池田 善昭（文学部教授）

西田の思想形成には、彼の生活や家庭の事情との関わりを見過ごすことはできない。西田哲学の難解さとは、普段知らずに閉じている心を自覚的に開く事態に関わっているのであるが、われわれは一般にこのことが極めて難しい。この難しさがそのまま西田哲学を難解にしているのである。そこで、彼が自らの心を開く体験を、なぜ、どのようにして開かなければならなかったのか、その具体的な事例を、ここでは二つ取り上げてみたい。ひとつは、若き西田と彼の父親との関係にまつわる事例である。父親の女性関係から被る母親の苦悩を見つづ両親の間に引き裂かれてゆく己の姿、借財の重みに耐え切れず破綻してゆく西田家の運命に翻弄されてゆく己の姿、西田は、そうした己の現状を乗り越えるべく、その力を禅の思想に求めてゆくのである。もうひとつは、壮年時の家庭事情に関わる事例である。妻や家族の度重なる病気、長男の若死に、そして妻の死に遭遇し、意気沮喪する己の姿に対峙して乗り越えるべく、その力を哲学に求めてゆくのである。西田の「矛盾の自己同一」とか「絶対無の場所」とかの思想は、この中から生まれた。哲学とは、乗り越えるべき力を付与するものでなければならない。彼の場合、生活史と思想形成の間には明らかに相関関

係が認められるのである。西田哲学の特質は、勿論、思想それ自体として理解できるものでなければならぬ。だが、従来、抽象的で難解とされた彼の思想を思想だけで理解するより、彼の固有な生き様、特異な生活体験などの具体的な事例に即応しつつ理解することの方が、むしろ、より一層適切ではないか。このことは、哲学学習に際して、生々しい具体的な生活事例に親しむことをもって、哲学思想を理解することに学習効果があることを示すものである。

第1回合宿研究会（2001.12.25～26）

テーマ：西田における哲学・道徳・宗教

報告者：有福 孝岳

（京都大学総合人間学部教授）

本論は、西田哲学における哲学と道徳と宗教の意味と役割と関係とを明らかにしようとしたものである。そのために、本論は、以下の四つのテーマ、すなわち、一、宗教と哲学 - 事実と説明 -、二、哲学の立場、三、宗教の根源性、四、道徳と宗教をめぐって展開される。最後に、本論に対する総括と反省を簡潔に述べる。

これらのテーマの探求によって、西田哲学とは、人間的生における宗教の根源性を徹頭徹尾確信した立場からの哲学思想である、ということが明らかにされる。西田は、道徳に対する補完的役割を宗教に与えたカントとは異なって、道徳的悪と宗教的罪との根源的差異性に着目することによって、道徳と宗教との間を極めて鋭く且つ厳しく区別するが、哲学と宗教との関係に関しては、不可分離的な不二一体性をみている。それほどまでに、知的好奇心に関わる「驚き」の感情ではなくて、宗教的な智慧と慈悲に関わる「悲哀」の感情に哲学的出発点をおく西田の哲学は、宗教的な色彩が極めて重要な契機

を占めている。しかしながら、西田哲学は、単なる宗教哲学にどどまるものではなくて、いわば未完成交響曲のように、無限の哲学的思想的広がりを持ちうる、無尽蔵の思想的宝庫である。

2001年度 課題別共同研究会報告

合宿研究会(2001.9.1～9.2)

人格発達と教育研究会

代表者 高垣 忠一郎(産)

第1回研究会(2001.6.22)

テーマ：中学三年生～子どもと教師の三年間の成長

報告者：春日井 敏之(文学部助教授)

春日井氏の学級づくりの目標は、子どもにとって安心できる居場所、言論の自由と対等な人間関係、参加の権利を保障し合えることである。春日井氏は、子どもとの心地よい人間関係を築くことが、自然にできる教師であるばかりでなく、受容・共感と要求・指導を統一した教育実践が行なえる力量を持っていることが、具体的な実践例を通じて窺えた。

競争原理を乗り越えて、仲間と支え合う中で、自分との出会い直しを行い、内面的な成長を遂げていくことが、作文や交換ノートからも読み取れた。

今日、多くの教師が困難を感じている中学生のクラス集団づくりや、不安や葛藤を抱えた思春期の子ども達の内面理解がどのようにして可能になったのか、これからも更に深めていきたいという意見が参加者から出された。

【櫻谷 真理子(産業社会学部助教授)】

テーマ(9.1):引きこもりについて

報告者：幸田 有史(京都市児童福祉センター)

『『不登校と引きこもり』地域精神保健の立場から-連携・ネットワーク-』と題して報告がなされた。

不登校や引きこもりの青年は、社会適応への暗黙の洗脳とそれから外れたことによる自己否定感と焦りを持っている。また、社会や人に出会いたいのだが、信頼に値するののかという不安を抱き、苦しんでいる。

こうした事例への対応として、環境調整...本人が最大限生きやすい環境をつくる。他機関とも連携する。親や本人の認知の修正...自責感を取り除き、良質な休養ができるようにする。親と共同での支援作業を行うために、なるべく早く親も自責感から解放される必要がある。以上の報告に対して、不登校や引きこもりを、罪悪感や負い目を溜め込み期間にせず、積極的、肯定的な意味を見出すことが大切だという指摘もなされた。

テーマ(9.2):ある高校生の事例について

報告者：今井 千和世(平安女学院高校教諭)

：鳥居 美佐子(平安女学院高校教諭)

自傷行為を繰り返す境界性人格障害の高校生への心理的援助についての報告がなされ、危機的な状況に陥り、まわりを巻き込むおそれがある場合、教師間の連携を強化する必要があることが確認された。

本児の父親は高学歴で専門職についているが、

妻への暴力が絶えない。父から母への暴力を目撃することによる心理的影響を受けて本児は育ち、自己卑下感、無力感、絶望感が強い。教師に対しては、愛情欲求を強く持つ一方、不安感から激しく攻撃したり、自傷行為を行って揺さぶりをかけてくる。母親は家族の問題は秘密にしており、本児の問題で話し合うこともできないのである。

将来のこともあるので、学校だけで抱えるのではなくほかの機関にもつなげる必要があることが話し合われた。

第2回研究会(2001.10.19)

テーマ：ある中学生の事例について

報告者：三輪 武彦(児童擁護施設つばさ園)

広瀬 雅典(児童擁護施設つばさ園)

中3A 男...父子家庭、本児5歳のとき母親家出。6歳で入所。中学生になり万引きなどの問題行動が増える。中3になり、不登校となるが、無断外出をしたり、施設内で暴れる。中3B 男...本児2歳のとき、両親離婚。兄2人と共に施設入所。父は厳しい人で、子どもに暴力をふるっていたが、本児が小6のとき、病気により死亡。中学入学後は、スポーツ系のクラブに入り、クラブ活動中心の生活を送っていたが、中3になり、A 男と一緒に施設内で荒れることが多くなる。

進路を考える時期でもあり、自分の将来像が見えてきたが、モデルも無いし、自分の大人になりゆくイメージが持てずに不安になっているのではという指摘がなされる。荒れるときは被害を最小限にし抑え、本児たちの日常での暮らしの中で、もっと目を向けたり、かかわる場面を増やすことが大切であろうといったことが話し合われた。

【桜谷真理子(産業社会学部助教授)】

第3回研究会(2001年12月7日)

テーマ：14歳の私

- 生後第4の新しい力の誕生

報告者：荒木 穂積(産業社会学部教授)

中学生の作文に書かれた親からの自律の葛藤について報告がなされた。

作文の指導を受けた影響からか、優等生的な気持ちの整理を行っていることの是非をめぐって議論がなされた。

渦中にいるときに、心の葛藤を言語化させることは問題があるという意見もあり、思春期の揺れる子どもとどう向きあっていけばよいのか考えさせられた。児童養護施設から、6人の方の参加があり、いろいろな問題を抱える子どもへの理解が深まった。

【桜谷真理子(産業社会学部助教授)】

発達相談・発達援助研究会

代表者 荒木 穂積(産)

第1回研究会(2001.7.2)

テーマ：事例研究 幼児期の発達診断法をめぐって

報告者：立田 幸代子(社会学研究科)

幼稚園児年長組(5歳児)の発達診断の実際をK式発達検査、心の理論課題、感情アイデンティティ課題などへの取り組み方を分析したものの報告を受け、討論した。

【荒木 穂積(産業社会学部教授)】

第2回研究会(2001年12月17日)

テーマ：要求の指さしについて
報告者：早川 千晴（社会学研究科）

自閉症の子どもが療育現場で「指さし」を獲得していく様子が VTR の記録などを交えながら詳しく報告された。

特に、発生をともなう要求場面での指さしは 3 項関係の成立が前提となるのではないかとの仮説が出された。討論では、3 項関係の成立には視線による人と物（または状況）との間での比較行動（レファレンス・ビヘイヴィア）の存在が欠かせないのではないかとの指摘がなされた。本事例では、最近、絵本などに描かれているものを「尋ねられる」と指さして応えることができる（可逆の指さし）が見られ始めており、言語による強化と指さしの発生との関連に話題がおよんだ。自閉症児では、視線による比較行動（レファレンス・ビヘイヴィア）の獲得が難しいことがわかっているが、3 項関係の成立を前提としないで「可逆の指さし」が発生するのか、などの諸点をめぐって活発な討論がたたかわされた。

【荒木 穂積（産業社会学部教授）】

また、方向画、家族画、保存などの描き分け方について、素朴心理学と「心の理論」との関連で検討した。

【荒木 穂積（産業社会学部教授）】

第 3 回研究会（2002.2.15）

テーマ：5 歳児の発達診断と遊び
報告者：立田 幸代子（社会学研究科）

5 歳児の発達診断のねらいと方法についてビデオおよびレポートによって検討した。

- ・ 対の呈示にもとづく対称性の成立過程
- ・ 系列化における試行錯誤および“ゆれ”の意味
- ・ メンタル・ローテーションの役割
- ・ イメージの展開とまとめ

などの論点について討論した。

2001年度 研究所日誌 (2001.4.1～2002.3.31)

□□□□ 4月 □□□□

- 24 代表者会議—————(第1回/修学館第1プロジェクト室)

□□□□ 5月 □□□□

- 24 運営委員会—————(第1回/修学館2F第1共同研究会室)
29 子ども(育ち合い)プロジェクト研究会——(第1回/創思館共同研究会室303)
30 家族プロジェクト研究会—————(第1回/創思館共同研究会室305)

□□□□ 6月 □□□□

- 11 家族プロジェクト研究会—————(第2回/創思館共同研究会室305)
12 コアプロジェクト(臨床社会学部会)研究会——(第1回/創思館コアプロジェクト室)
22 課題別 人格と発達研究—————(第1回/平安女学院中学・高校室町校舎2F会議室)
25 家族プロジェクト研究会—————(第3回/創思館共同研究会室305)
25 家族・臨床教育プロジェクト(合同部会)研究会——(第3回/創思館共同研究会室305)
27 子ども(育ち合い)プロジェクト研究会——(第2回/創思館共同研究会室303)

□□□□ 7月 □□□□

- 2 課題別 発達相談・発達援助研究会——(第1回/修学館2F第2共同研究会室)
3 (臨床社会学部会)研究会—————(第2回/創思館トレーニングルーム2)
3 運営委員会—————(第2回/修学館2F第1共同研究会室)
9 家族・臨床教育プロジェクト(合同部会)研究会
—————(第2回/創思館トレーニングルーム2・3)
17 コアプロジェクト(臨床社会学部会)研究会——(第3回/創思館コアプロジェクト室)
23 家族・臨床教育プロジェクト(合同部会)研究会——(第3回/創思館共同研究会室305)
26 子ども(育ち合い)プロジェクト研究会——(第3回/創思館共同研究会室303)
30 コアプロジェクト(臨床社会学部会)研究会——(第4回/創思館コアプロジェクト室)

□□□□ 8月 □□□□

- 30 コア・ディグ・エト(臨床社会学部会)研究会——(第5回/創思館コラボプロジェクト室)

□□□□ 9月 □□□□

- 1 課題別 人格発達と教育合宿研究会——(吉水路)
10 家族・臨床教育コア・ディグ・エト(合同部会)研究会——(第4回/創思館共同研究会室305)
18 コア・ディグ・エト(臨床社会学部会)研究会——(第6回/創思館コラボプロジェクト室)
24 家族・臨床教育コア・ディグ・エト(合同部会)研究会——(第5回/創思館共同研究会室305)
26 子ども(育ち合い)プロジェクト研究会——(第4回/創思館共同研究会室303)

□□□□ 10月 □□□□

- 2 コア・ディグ・エト(臨床社会学部会)研究会——(第7回/創思館コラボプロジェクト室)
9 家族・臨床教育コア・ディグ・エト(合同部会)研究会——(第6回/創思館トレーニングルーム2)
9 運営委員会——(第3回/修学館2F第1共同研究会室)
13 ライフデザインプロジェクト研究会
——(第1回/以学館ボランティアコーディネータープログラム室)
22 家族・臨床教育コア・ディグ・エト(合同部会)研究会——(第6回/創思館トレーニングルーム2)
16 コア・ディグ・エト(臨床社会学部会)研究会——(第8回/創思館コラボプロジェクト室)
19 課題別 人格発達と教育研究会——(第2回/平安女学院中学・高校室町校舎2F会議室)
22 家族・臨床教育コア・ディグ・エト(合同部会)研究会——(第7回/創思館トレーニングルーム2)
23 コア・ディグ・エト(臨床社会学部会)研究会——(第9回/創思館コラボプロジェクト室)
25 プロジェクトB 個人史の事例研究会——(第1回/修学館2F第一共同研究会室)
29 家族・臨床教育コア・ディグ・エト(合同部会)研究会——(第8回/創思館トレーニングルーム2)
30 コア・ディグ・エト(臨床社会学部会)研究会——(第10回/創思館コラボプロジェクト室)

□□□□ 11月 □□□□

- 6 コア・ディグ・エト(臨床社会学部会)研究会——(第11回/創思館コラボプロジェクト室)
10 ライフデザインプロジェクト研究会——(第2回/以学館2階25号室)
12 家族・臨床教育コア・ディグ・エト(合同部会)研究会——(第9回/創思館トレーニングルーム2)
13 コア・ディグ・エト(臨床社会学部会)研究会——(第12回/創思館コラボプロジェクト室)
16 臨床教育プロジェクト研究会——(第1回/創思館プロジェクト研究室406・406)
19 家族・臨床教育コア・ディグ・エト(合同部会)研究会——(第10回/創思館トレーニングルーム2)

- 21 子ども(育ち合い)プロジェクト研究会——(第5回/創思館共同研究会室303)
- 26 家族・臨床教育プロジェクト(合同部会)研究会——(第11回/創思館トレーニングルーム2)
- 29 プロジェクトB 個人史の事例研究会——(第2回/修学館2F第一共同研究会室)

□□□□ 12月 □□□□

- 7 課題別 人格発達と教育研究会——(第3回/アトリエ西村)
- 10 家族・臨床教育プロジェクト(合同部会)研究会——(第12回/創思館共同研究会室305)
- 17 課題別 発達相談・発達援助研究会——(第2回/修学館2F第2共同研究会室)
- 18 運営委員会——(第4回/創思館1F応接室)
- 19 子ども(育ち合い)プロジェクト研究会——(第6回/創思館共同研究会室303)
- 21 臨床教育プロジェクト研究会——(第2回/創思館共同研究会室306)
- 25~26 プロジェクトB 個人史の事例合宿研究会——(熱海市 KKRホテル熱海)

□□□□ 1月 □□□□

- 17 子ども(育ち合い)プロジェクト研究会——(第7回/創思館共同研究会室303)
- 19 ライフデザインプロジェクト研究会——(第3回/以学1階演習・実習準備室3)
- 21 家族・臨床教育プロジェクト(合同部会)研究会——(第13回/創思館共同研究会室305)

□□□□ 2月 □□□□

- 1 臨床教育プロジェクト研究会——(第3回/創思館トレーニングルーム2)
- 15 課題別 発達相談・発達援助研究会——(第3回/修学館2F第2共同研究会室)
- 18 家族・臨床教育プロジェクト(合同部会)研究会——(第14回/創思館共同研究会室305)
- 19 子ども(育ち合い)プロジェクト研究会——(第8回/創思館共同研究会室303)
- 19 臨床教育プロジェクト研究会——(第4回/創思館共同研究会室305)

□□□□ 3月 □□□□

- 12 運営委員会——(第4回/創思館1F応接室)
- 15 子ども(育ち合い)プロジェクト研究会——(第9回/創思館共同研究会室303)
- 23 ライフデザインプロジェクト研究会——(第4回/以学1階演習・実習準備室3)

当研究所では、教職員のみなさまからの所報掲載の原稿を歓迎しています。

立命館大学 人間科学研究所報 第3号

発行日 2002年3月

編集・発行 〒603-8577 京都市北区等持院北町56-1

立命館大学 人間科学研究所

TEL 075-465-1111(代表) 内線2558

FAX 075-465-8245 内線2544
